

國學院大學学術情報リポジトリ

沖縄北部瀬底方言の音調体系再考：
特集多様化する日本語研究の現在

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ローレンス, ウェイン, Lawrence, Wayne P. メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000433

沖縄北部瀬底方言の音調体系再考

ウエイン・ローレンス

1. はじめに

瀬底島は沖縄本島の本部半島の西方沖約600メートルに位置する周囲7.3キロの島である。1985年に瀬底大橋で本島につながり、2018年3月現在の島の人口は805人（374世帯）である。

瀬底島出身の言語学者、内間直仁氏（1939年 - 2014年）は自らの内省に基づいて瀬底方言の資料をいろいろ発表している。中でも、平山ほか（1992-1993）に掲載されている約2300項目の語彙資料（例文中の単語を含めば、異なり語数は3000語を超えるであろう）には音調を表す記号が付記されている。このような資料があるというのに、この資料は今まで沖縄北部方言のアクセント研究に寄与していないのである。その理由の一つとして、音韻の解釈と実際の音調との関係が必ずしも明白でないことが挙げられる。

内間（1983: 287-8）は瀬底方言の音韻型とその音声実現の対応を提示しており（表1参照）、平山ほか（1992-1993）掲載の資料はこれを踏襲している。しかし、表1からわかるように、内間（1983）の分析案に従えば、音韻解釈から実際の音調を導けない場合がある。

表1 瀬底方言の音調の型（内間 1983: 287-8に基づく）

拍	音韻論的解釈	反省的型	語 例
2拍	○○	●●, ●●▶	[ki:] (毛) [Fu:] (帆) [tui] (鳥) [ha:] (川)
		○●, ○●▶	[ʔuʔi] (牛) [jura] (枝) [ʔiʔi] (石) [habi] (紙)
	○○1	●●, ●●▷	[Fa:] (外) [ʔiki] (息) [ʔuʔi] (白) [ʔiʔu] (露)
	1○○	○●, ○●▶	[ki:] (木) [Fu:] (粉) [ta:] (田) [ma:] (馬)
3拍	○○○	●●●, ●●●▶	[wain] (割る) [ʔuin] (売る) [hain] (刈る)
		○●●, ○●●▶	[kibui] (煙) [tunai] (隣) [makun] (巻く)
		○○●, ○○○▶	[makka] (枕) [ʔanra] (油) [miruri] (芽)
	○○○1	●●●, ●●●▷	[me:bi] (まね) [kunʔi] (根気) [hoiŋ] (買う)
		○●●, ○●●▷	[ʔiru:] (白) [baʔi:] (叔母) [ʔatin] (当てる)
	1○○○	○○●, ○○○▶	[ʔira:] (顔) [ʔiru:] (色) [Fana:] (花) [kagan] (鏡)

4 拍	○○○○	●●●●, ●●●●▷ ○●●●, ○●●●▷ ○○●●, ○○●●▷ ○○○●, ○○○●▷	[san:jɪn] (三味線) [ni:Fara] (胸) [ʔahagai] (光) [ha:fɪgɪ] (痰) [taŋka:] (誕生日) [Funto:] (本当) [kuru:ma] (車) [ʔusa:gi] (兎) [Fuku:ru] (袋)
	○○○○1	●●●●, ●●●●▷ ○●●●, ○●●●▷ ○○●●, ○○●●▷	[taŋka:] (方向) [kampaŋi] (はげ) [ʔaku:bi] (欠伸) [jiru:jɪ] (印) [ha:dʒimaki] (旋風) [na:mugi] (小麦) [ʔiŋi:] (五つ) [ʔasasai] (蟬)
	○○1○○	●●○○, ●●○○▷	[Fabuqaŋi] (蜘蛛) [ʔusukubu] (盆の窪)
	1○○○○	○○○●, ○○○○▷	[wakain] (わかる) [sukoin] (作る)

音韻論的解釈では ○ は拍 (モーラ) を表し、反省的型 (具体的高低) では ○ = 低い拍, ● = 高い拍で、三角は助詞である。

表 1 にある複数の「反省的型」(音調) をもつ /○○, ○○○, ○○○1/ の各音韻論的型をみれば、その音調は音節構造によって決まることがわかる。例えば、/○○○/ の場合、●●● は一音節語で、○●● は二音節目が重音節、○○● は重音節の次に軽音節がある場合の音調となる。だが、/○○○○/ と /○○○○○1/ の場合、次の A の例のように、音調の違いを音韻表示から導き出すことはできないようである⁽¹⁾。

A. i. /○○○○○1/ ⁽²⁾

「雄」 ウームン1 $\overline{wu:mun}$ (62) 「雌」 ミームン1 $\overline{mi:mun}$ (157)⁽³⁾
「黄色」 キールー1 $\overline{ki:ru}$ (76) 「青色」 オールー1 $\overline{ʔo:ru}$ (44, 156)
「燃やす」 モースン1 $\overline{mo:sun}$ (159) 「直す」 ノースン1 $\overline{no:sun}$ (98, 124)

ii. /○○○○○/

「西風」 イリハジ $\overline{ʔiriha:dʒi}$ (69) 「南風」 ヘーハジ $\overline{he:ha:dʒi}$ (69)
「味噌瓶」 ミスガミ $\overline{misugami}$ (73) 「耳壺」 ミミチブ $\overline{mimiŋibu}$ (73, 117)
「勉強」 ベンキョー $\overline{benkjo}$ (146) 「税金」 ジョーノー $\overline{dʒo:no}$ (103)

このことから、表 1 は音韻の型の数が足りない (例えば、Ai の $\overline{wu:mun}$ が /○○○○○1/ の型なら、 $\overline{mi:mun}$ は別の型でなければならない) ことがわかる。表 1 のもう一つの問題として、表にない音調型の例 (B) の存在が挙げられる。

B. i. ○○●, ○○●▷ と ○○○●, ○○○●▷

「会社」に $\overline{kwaif̣a-ne}$ (66R, 116R) 「一里ばかり」 $\overline{ʔiŋi-ri-bake}$ (133L)
「三時までなら」 $\overline{sandʒi-mari-jare}$ (165R) 「十時には」 $\overline{dʒu:dʒi-ne:ja}$ (130L)
「菌茎から」 $\overline{Faŋi-ri-hara}$ (134L) 「山田 (という)」 $\overline{jama-ra-ri}$ (51L)
「高さまで」 $\overline{taka:sa-mari}$ (92/65)

ii. ○●●○ と ●●●○

「びろうの葉で作った笠」 $\overline{kubagasa}$ (69) 「落書き」 $\overline{rakugaki}$ (166R)
「腸」 $\overline{harawata}$ (114)⁽⁴⁾ 「鹿兒島」 $\overline{kagojima}$ (92/72)

「言い付け」 $\overline{\text{pi:jiki}}$ (76L)

「迷惑」 $\overline{\text{me:waku}}$ (157)

「教室」 $\overline{\text{kjo:jitsu}}$ (77)

「落花生」 $\overline{\text{dgi:mami}}$ (164)

内間 (1994: 208-10) は、何の解説もなく、別の分析案を発表している (表 2 参照)。

表 2 瀬底方言の音調の型 (内間 1994: 208-10 に基づく)

拍	型	具体的高低	語 例
2 拍	○○	●●, ●●▶ ○●, ○●▶	[pi:] (日) [Fa:] (葉) [ju:] (世) [tui] (鳥) [tin] (天) [ʔutu] (音) [Faʃi] (橋) [hama] (鎌) [jumi] (嫁)
	○○1	●●, ●●▷	[Funi] (骨) [maʃi] (松) [mo:] (藻) [nan] (あなた)
3 拍	1○○	○●, ○○▶	[pi:] (火) [ju:] (湯) [kin] (着物) [tin] (照る)
	○○○	●●●, ●●●▶ ○●●, ○●●▶	[tain] (足りる) [Fuin] (振る) [ʔuin] (売る) [kibui] (煙) [makun] (巻く) [Fukun] (拭く)
	○○○1	●●●, ●●●▷ ○●●, ○●●▷	[me:bi] (まね) [kunʃi] (持久力) [ta:ʃi] (二つ) [ʃiru:] (白) [maja:] (猫) [magin] (曲げる)
	1○○○	○○●, ○○○▶ ○○●, ○○○▶	[ti:tʃi] (一つ) [ʔanra] (油) [ʔuttu] (弟) [miruri] (芽) [jama:] (山) [Fana:] (花) [kagan] (鏡) [tain] (垂る)
	○○○○	●●●●, ●●●●▶ ○●●●, ○●●●▶	[taŋka:] (方向) [saŋʃin] (三味線) [ni:Fara] (胸) [jagusami] (未亡人) [ʔahagai] (明日)
	○○○○1	○●●●, ○●●●▷ ○○●●, ○○○●▷	[ʔaku:bi] (欠伸) [ʔaga:ri] (東) [hadʒimaki] (旋風) [taŋka:] (誕生日) [ʔaʃi:] (昼食) [ʔugamun] (拝む)
4 拍	○○1○○	●●○○, ●●○○▷	[Fabugaʃi] (蜘蛛) [ʔwa:ʃiki] (天気)
	1○○○○	○○●●, ○○○●▶ ○○○●, ○○○○▶ ○○○●, ○○○○▶	[kuraga:] (芋の一種) [Funto:] (本当) [nukugiri] (鋸) [ʔana:ni] (阿壇) [ʔa:buku] (泡) [ʔamain] (余る) [ʔumuin] (思う) [sagain] (下がる)

型の数と形は表 1 の旧案と変わりはないが、型と具体的な高低との間の関係は改善されている。新案 (表 2) の体系だと一つの型に複数の音調が表れる場合、その違いは音節構造に帰するので、Aii の問題はこの新案で解決される。だが、B の問題がそのまま残る。さらに、1983 年の旧案にあった 4 拍の ●●●● (▷) は新案から姿を消しているものの、資料に Ai の左の例の他に次の例 (C) が見られることから表 2 も不完全であると言わざるをえない。

C. ●●●●, ●●●●▷

「経験と」 $\overline{\text{keiken-tu}}$ (92/64)

「一日に」 $\overline{\text{pitʃi-ne}}$: (92/63, 92/64)

「培土と(いう)」 $\overline{\text{bairo-ri}}$ (92/70)

「^{ひよめき}顚門が」 $\overline{\text{cu:riki-nu}}$ (141)

C の四拍語と同様に、五拍名詞にも $\overline{\text{kampaʃa}}$: 「木登りとかげ」 (71) の例もみられる⁽⁵⁾。

本稿では、瀬底方言の音調体系を分析しなおし、より充実した分析案を提案する。そのために、最初に型の数が比較的少ない動詞と形容詞の音調の型を分析して (2 節)、これを基に長い名詞の音調型を範疇化する (3 節)。4 節では 2 拍語

から 4 拍語の音調の型を表の形にまとめる。5 節では瀬底方言の音調体系関連の未解決の問題を今後の課題として列挙する。

2. 用言からみた音調範疇

内間 (1997) の資料では、動詞のほとんどは三つの音韻範疇に分類されているようである⁽⁶⁾。

- (1) ワジン wad̄jin 「怒る」(61) マギン magin 「曲げる」(表 2) ハキン hakin 「掛ける」(69)
 タメイン tamain 「溜まる」(112) トウメイン tumain 「泊まる」(123) ラメイン ramain 「黙る」(112)
 ウーユン wu:jun 「酔う」(163) アーユン ʔa:jun 「会う」(44) ユーユン ju:jun 「結う」(161)
 クンブン kumbun 「結ぶ」(155) ニンブン ninbun 「眠る」(130) ハンブン hambun 「被る」(72)
 フメユン Fumejun 「結ぶ」(111) ハメユン hamejun 「探す」(90) ムゲユン mugejun 「騒ぐ」(93)

表 2 の新案でも 3 拍動詞は三つの型に分類されるが、本稿では動詞は基本的に高起と低起の二種類であると分析する。高起式は語頭音節が重音節の場合、その音節から高いが、そうでない場合、高音調はその二拍目から始まる⁽⁷⁾。この規定に合わない、低音調で始まる動詞を低起音調動詞とする。

(2)	高起音調動詞	低起音調動詞
2 拍	sun 「する」(103)	ku:n 「来る」(53R, 77L, 109L)
3 拍	Fuin 「振る」(145)	Fuin 「降る」(145)
	ki:n 「着る」(78)	ki:n 「切る」(78)
	sakun 「咲く」(91)	sakun 「裂く」(91)
4 拍	watain 「渡る」(167)	wakai:n 「解る」(100)
	ʔaki:n 「開ける」(455)	waki:n 「分ける」(166)
	ku:jun 「閉じる, 塞ぐ」(122, 143)	ku:jun 「食いつく」(72)
	kurusun 「殺す, 殴る」(89, 125)	kurasun 「暮らす」(82)
5 拍	Fad̄zimai:n 「始まる」(134)	kutuwa:n 「断る」(87)
	wanrain 「料理する」(165)	çitti:n 「捨てる」(102)
	ha:rakun 「乾く」(74)	wanʔamen 「弁償する」(146)
	ʔutaqajun 「疑う」(57)	ʔururukun 「驚く」(63)
6 拍		çitamikasun 「ぼんと打つ」(82)

表 2 では sagai:n 「下がる」と ʔuqamun 「拝む」はそれぞれ /○○○○○/ と /○○○○○/ という別の範疇に分類されているが、Fari:n (138) ~ Farijun (138) 「晴れる」, pigui:n (139) ~ pigujun (118R) 「冷える」, suko:n (111) ~ sukojun (116, 92/63) 「作る」, wakai:n (100) ~ waka:n (166) 「解る」の例からわかるように⁽⁸⁾、

低起音調動詞の ○○○● と ○○●● の違いは音節構造による。基本的に語末拍を含む音節が高いが、語頭の弱強型 (iambic) 韻脚が低い⁽⁹⁾。旧案の表 1 では、語頭に 1 がある語形は語末拍のみが高く、助詞が後接する時その高音調は助詞に移動することになる。しかし、新案 (表 2) では、語末音節が高い。但し、語末音節が語頭韻脚と重なる場合、語末拍のみが高音調をになう。助詞は基本的に低接するが、高音調をになっている拍が音節でない場合、その高音調は後続する助詞に移動する⁽¹⁰⁾。また、新案 (表 2) では語末に 1 がある語形は語末拍および前語末拍を含む音節が高く、助詞は低接する。これは長い複合名詞にも多くみられる音調 (3) であるため、瀬底方言の一つの音調の型であると断定できよう。

- (3) jinagujagusami 「後家」(86) jakubadʒitu:mi 「役場勤め」(160)
 sa:ta:dʒukui-nu 「砂糖作りの」(92/63) ʔo:Fudʒide:-hara 「王府時代から」(92/72)
 ʔo:gatafe:to:ko:ɔ̃o:-nu 「大型製糖工場が」(92/63)
 ʔi:binga:ni: (135R, 162) ~ ʔi:binga:ni 「指輪」(137R)
 ʔanrabutubutu: 「脂っこいさま」(49)

(2) の二つの動詞音調型の他に、実は少数の動詞に別の音調型が存在する。
 ʔurin 「熟す」(99), haʃimi(:)N 「掴む, 握る」(115, 127), ʔuʃiŋkun 「俯く」(57, 内間 1983: 286) の三語は語頭の軽音節が低くないという点で、これは上で述べた高起音調動詞と性質の異なるものであると言えよう。語頭韻脚が高いという第三の動詞音調範疇である⁽¹¹⁾。

複合動詞の場合 (4) は、高起式動詞も低起式動詞も後部成素の第一韻脚が高い。

- (4) 高起式 低起式
 ɕip-patakun 「引きずる」(139R) ʃip-pirakasun 「潰す」(117)
 ʃiki-ʔatain 「突き当たる」(144) ʃik-kakin (103) ~ ʃik-kakijun 「腰掛ける」(内間 1992a: 301)
 ʔuh-ho:jun 「追い払う」(60) haki-ju:sun 「書ける」(内間 1992a: 301)

形容詞では ʔataraʃen 「惜しい」(62) 対 ʔuturuʃen 「恐ろしい」(62) のような音調型の対立がある。旧案に従っている内間 (1997) では両方とも /○○○○○1/ になっているが、動詞と同様に高起 (二拍目を含む音節から高い) と低起 (語頭韻脚が低い) の区別が必要である。低起式形容詞の主な活用形の音調は (5) のとおりで、確定条件形にさした点は韻脚の境界を標示する。

- | | | | |
|-------------|---------|--------|-------------|
| (5) | 終止形 | -ク形 | 確定条件形 |
| 「飢えている」(56) | ʔja:ʃen | ʔja:ku | ʔja:sari.ba |

「暖かい」(47)	nuku [̄] ʃeN	nuku [̄] ku	nuku. [̄] sari.ba
「危ない」(48)	ʔuka:ʃeN	ʔuka:ku	ʔuka:. [̄] sari.ba
「大きい」(61)	ma:gi [̄] ʃeN	ma:gi [̄] ku	ma:. [̄] gisa.ri [̄] ba
「忙しい」(52)	ʔiʃunaʃeN	ʔiʃunaʃiku	ʔiʃu.nasa.ri [̄] ba
「悪戯っぽい」(49)	ʃiraŋkuʃeN ⁽¹²⁾	ʃiraŋkuʃiku	ʃiraŋ.kusa.ri [̄] ba
「冷たい」(117)	pi:guruʃeN	pi:guruku	pi:. [̄] guru.sari.ba
「健康である」(84-5)	gandʒu:ʃeN	gandʒu:ku	gan.dʒu:. [̄] sari.ba
「柔らかい」(161)	jaFFara:ʃeN	jaFFaraku	jaF.Fara.sari.ba ⁽¹³⁾
「肌が美しい」(135)	ʔirudʒura:ʃeN	ʔirudʒura:ku	ʔiru.dʒura:. [̄] sari.ba
「うるさい」(59)	juŋgaʃimaʃeN	juŋgaʃimaʃiku	juŋ.gaʃi.masa.ri [̄] ba
「身窄らしい」(153)	pinso:ra:ʃeN	pinso:ra:ʃiku	pin.so:. [̄] ra:. [̄] sari.ba ⁽¹⁴⁾

-ク形の音調は -ku およびそれに先行音節が高い。これは (2) の動詞や (3) の名詞と同じく、語末二拍 (を含む音節) が高い型である。

確定条件形には三通りの音調パターンがある — (a) -sari- のみが高い、(b) -sa- とその前の音節が高い、(c) -sari- とその前の音節が高い。共通点は -sa- が高い点である。-sa- の前の音節が高くなるのは、その音節が語頭韻脚に含まれない場合である。-sa- に後続する ri が高くなるのは、ri が sa と同じ韻脚に入っている場合である。高音調が -sa とその左端にある音節にまず付与され、その次に sa を含む韻脚全体が高くなる⁽¹⁵⁾。

終止形は -ʃeN およびその前の音節が高い⁽¹⁶⁾。

高起式形容詞 (6) は音調の上昇位置が動詞の高起式音調のと一致する以外は、その音調の具現形は低起式形容詞 (5) のと変わらない。

(6)	終止形	-ク形	確定条件形
「重い」(64)	ʔubuʃeN	ʔubuku	ʔubu.sari.ba
「軽い」(74)	gaʃʃeN	gakku	gas.sari.ba
「惜しい」(62)	ʔatarafʃeN	ʔataraku	ʔata.rasa.ri [̄] ba
「可愛い」(74)	hana:ʃeN	hana:ku	hana:. [̄] sari.ba

3. 長い複合名詞からみた音調範疇

1 節の資料でみる限り、名詞の音調型の数は単語の拍数を少し超えそうであるが、長い名詞を見てみると次の (7a-m) の14の音調型と3節の (3) の型の計15の音調型になり、拍数の倍ぐらゐの型数になる。

- (7) a. hataraki-mun 「働き者」(136)
 b. ʔara:-kutuba 「ぞんざいな言葉」(108L)
 ʔagai-tira-ja 「朝日は」(46)
 gokin-ʔiri-nu 「五斤入りの」(92/64)
 c. nama-ʔiburujami 「頭がなんとなく痛いこと」(102)
 ʔanra-misu 「油で炒めた味噌」(153)
 kusari-hadʒa 「腐った臭い」(68R)
 nama-dʒiru:-ja 「生汁は」(92/68)
 d. ʔi:samanto:-ji: 「正座」(104)
 ʔidʒa-jinagungwa 「長女」(114)
 ʔuʔi-gatai 「相談」(106)
 ʔwa:Furu-ja: 「豚小屋」(89)
 e. ha:-so:dʒimaja: 「いもり」(54) (< so:dʒimaja: 「やもり」(121))
 ki:-re:kuni 「人參」(128) (< re:kuni 「大根」(108))
 dʒinan-jinagungwa 「次女」(95) (< jinagungwa 「女の子」(66))
 mata-ma:ga 「曾孫」(141) (< ma:ga 「孫」(149))
 ni:-gatagata 「ドキドキすること」(内間 1983: 292-3)
 f. ʔiki-ha:ha: 「息はあはあ」(70)
 g. ʔu:safʔi-ʔi:bi 「人差し指」(140)
 h. ʔuFujumi-jinugui 「旧暦の7月18日の祭り」⁽¹⁷⁾ (64R, 139L)
 ʔi:kwa:-ʔui 「西瓜」(101)
 ʔaʔʔi:-ma:ru: 「午前」(87)⁽¹⁸⁾
 nandʒit-ton 「何十トン」(92/63)
 i. so:kʔi-buni 「肋骨」(48)
 j. ʔigu:tu-gi: 「仕事着」(95)
 to:tu-gaʔʔi 「おにひとで」(58, 内間 1983: 294) (< gaʔʔi 「海栗」(58))
 ʔaga:ri-hadʒi 「東風」(69R)
 k. me:-mahai 「飯茶碗」(167) (< me: 「飯」(157), mahai 「椀」(167))
 tʃu:-gawai 「変わり者」(75)
 l. he:-kagin 「灰加減」(92/65) (< he: 「灰」(132), kagin 「加減」(92/65))
 m:ʕi:sa-magai 「寒さで縮こまること」(93)
 n. ʔiki-rumai 「行き止まり」(115)

(7a,c) は助詞が高接する範疇で、その違いは高起と低起の式の違いである。(7b) は助詞が低接する範疇で、これは (3) の低起式の複合名詞と式の違いのみで区別される型であると思われる。ʔiʔibannabi-nu 「一番鍋の」(92/67) と jubannabi-ri 「四番鍋と(いう)」(92/67) のような、式の違いのみで異なる語対は (7b) と (3)

の結びつきを裏付ける。

(7d) の例は語頭韻脚が高い型で、これは単純動詞の第三の音調型と同じ型である。

(7e, f, g, h, i, j) の例は一つの音韻範疇にまとめることができる。つまり、この例すべてにおいて語頭韻脚に隣接する最大の韻律単位が高く、そのうちの (7e, g, j) はその高起式で、(7f, h, i) は低起式である。

(7k) と (7l) は音節構造に違いがないものの、音調の下降の位置が異なるため問題である。しかし、(7e, f, g, h, i, j) を「語頭韻脚に隣接する非語末の最大の韻律単位」と捉えなおせば、(7k) もこのグループに加えられるようになる。

(7n) も (7k, l) と同じく前部要素が2拍で後部要素が軽音節と重音節からなる韻脚であるが、(7n) の方は複合動詞由来の名詞で、複合動詞の音調型 (4) になっている⁽¹⁹⁾。

(7l) と (7m) は式だけで区別される。(7l) の語形の音調はインフォーマントから確認を得たが、(7m) の語形は内間 (1997: 89) では *çi:sa-magai* になっていることから、(7m) の音調型の存在は確実ではないが、確実に存在する高起式の (7l) に対応する低起式バージョンであることから、誤植であるとは速断できない。

複合名詞の主要な音調型 (3, 7a-k) は三つの式 (高起・低起・語頭韻脚高い) と三つのアクセント型 (無アクセント・語末アクセント・語頭韻脚に隣接する非語末の最大の韻律単位アクセント) の組み合わせであると考えられる。

4. 改定案

上記の分析を踏まえて内間の旧案 (表1) および新案 (表2) を作り直すと表3ができあがる。

表3 瀬底方言の音調の型 (改定案)

拍	音韻論的解釈	具体的高低	語 例
2拍	〇〇	●● (▷) ○● (▷)	[ki:] (毛) [Fa:] (葉) [Fai] (梁) [tui] (鳥) [dʒin] (膳) [ʔuʃi] (牛) [Fana] (鼻) [ʔutu] (音) [ŋgi] (刺)
	〇〇1	●● (▷)	[Funi] (骨) [ʔuʃi] (白) [Fa:] (外) [Fai] (針)
	〇〇	○●, 〇〇▷	[ki:] (木) [Fa:] (菌) [kui] (杭) [kin] (着物)
	〇〇〇	●●● (▷) ○●● (▷)	[ho:dʒi] (麴) [kibui] (煙) [kaʃu:] (鰹) [risuku] (利息)
3拍	〇〇〇1	●●● (▷) ○●● (▷)	[kunʃi] (持久力) [ta:ʃi] (二つ) [ʔuin] (売る) [ʃiru:] (白) [maja:] (猫) [magin] (曲げる)
	〇〇1〇	●●○ (▷)	[wa:ʃi] (豚肉)
	〇〇〇	○●● (▷) ○○●, 〇〇〇▷	[kwa:ʃi] (お菓子) [ʔanra] (油) [miruri] (芽) [jama:] (山) [Fana:] (花) [kagan] (鏡)
	〇〇〇1 ⁽²⁰⁾	○●● (▷) ○○●, 〇〇〇▷	[kwaiʃa] (会社) [bjo:ki] (病氣) [ji:n] (貰う) [tain] (垂る) [wuin] (折る)

4 拍	〇〇〇〇	●●●● (▷) ○●●● (▷)	[taŋka:] (方向) [nuimʊn] (乗物) [ni:Fara] (胸) [jaɡusami] (未亡人) [ʔahagai] (明り)
	〇〇〇〇1	●●●● (▷) ○●●● (▷)	[ɕu:riki] (顯門) [ŋi:ʃidʒi] (血統) [wu:rui] (雄鶏) [ʔaɡa:ri] (東) [hadʒimaki] (旋風) [mawain] (回る)
	〇〇〇1〇	●●●○ (▷) ○●●○ (▷)	[dʒi:mami] (落花生) [me:waku] (迷惑) [harawata] (腸) [rakugaki] (落書)
	〇〇1〇〇	●●○ (▷) ●●○ (▷)	[Fabuɡaʃi] (蜘蛛) [ʔwa:ʃiki] (天気) [nu:nu:] (どれら) [ʔuʃiŋʃi] (俯いて)
	〇〇〇〇	○●●● (▷) ○●●● (▷)	[kuraga:] (芋の一種) [watamun] (腸) [nukugiri] (鋸) [ʔana:ni] (阿壇) [ʔa:buku] (泡)
	〇〇〇〇1	○●●● (▷) ○●●● (▷) ○●●● (▷)	[taŋka:] (誕生日) [Fuʃʊkuru] (懷) [ʔuɡamun] (拝む) [taka:sa] (高さ) [Faʃiŋʃi] (菌茎) [dʒitenʃa] (自転車) [ʔamaiŋ] (余る) [sagaiŋ] (下がる) [ʔumuŋ] (思う)

(〇 = 高起式、● = 低起式、1 = アクセント)

表3にある音調型のほかに、感嘆詞と副詞の一部に特殊と思われる音調型（語頭拍が高い型（8a）、第二韻脚末の特殊拍が高い型（8b）、非語末の特殊拍から音調が上昇する型（8c））が存在する。

- (8) a. ʔaʃī 「怒った時の応答」(132), ʔē: 「注意を促すことば」(132)
 b. marute:ṅ̄ 「まん丸く」(152L), ʃassa:ṅ̄ 「沢山」(110)
 c. jo:nnā 「ゆっくり」(92/65) (～ jo:nnā: (95L) ～ jonnā: (162))

5. 残る研究課題

瀬底方言の音調体系は中核的な体系（表3や（3）、(7a-k)）と周辺の音調型（(7l,m), (8)）と形容詞の終止形と確定条件形）とに分けられる。中核的な体系だけをみても、次の問題が残されている。

- 3節の (7k) と (7l) の違い
- 高起式の me:waku 「迷惑」、harawata 「腸」 などに対する低起式音調型 (/〇〇〇1〇/ [○●●○]) の例は資料にないようであるが、この型が存在しないなら、その理由は不明である。
- 表3にある ○●●●, ○●●●▷ (ʔamaiŋ̄ 「余る」、sagaiŋ̄ 「下がる」など) の語例はすべて一韻脚語で、低起式である故に語頭韻脚が低くなるが、句のどこかに高音調がなければならないので、語末拍が高く発音される。だが、二韻脚語である gakkī̄ 「牡蠣、意地汚い者」(52, 67) も ○●●●, ○●●●▷ である。低起式無アクセントなら kuraga: 「芋の一種」 Funto: 「本当」と、低起式語末アクセントなら taŋka: 「誕生日」 ʔaʃī̄: 「昼食」と同じ音調が期待されるから、gakkī̄ はなぜ語末の特殊拍のみが高いかが今後解明されなければならない。

- ・ 低起式の動詞の活用形の二拍からなるものは語頭韻脚が高い式になるようである。

haku [~] 「書く」(68)	haki-jo:「書けよ」(内間 1992a: 300)
mi: [~] 「見る」(154)	mi [~] i「見て」(92/66)
muttu [~] 「持つ」(158)	mu [~] i-kun「持って来る」(134)
nai [~] 「なる」(126)	naru-mari:「なるまで」(92/72)

このように低起式と語頭韻脚が高い式との間に関係があるが、この関係を音韻論の中でどのように捉えればよいかは不明である。

- ・ 語末の 1 の有無は後続する助詞の高低を決定するはずであるが、次の例が示すように、直前形式が同じでも助詞の音調的ふるまいは一律ではない⁽²¹⁾。

kuru:ma-nu「自動車が」(82)	kuru:ma- [~] i/sai「車で」(118R)
ji [~] ke:mun-nu「使用人の」(92/68)	ji [~] ke:mun-ja「使用人は」(92/67)
nama-nu/ja/ga「今の / は / が」(54)	nama-hara「今から」(92/72)
hama:ru-nu「かまどの」(92/67,68)	hama:ru-ne:「かまどに」(92/66)

助詞の接続音調を詳細に調査する必要がある。

- ・ 沖縄語諸方言の祖語が三型音調体系であったと考えられるが、この体系から瀬底方言の多型の音調体系がどのようにできたかを説明する必要がある。

これらの課題をはじめ、アクセント研究者が瀬底方言の音調体系のより深い理解に取り組むことを切望する。

註

- (1) 例の出典が二桁か三桁の番号は内間 (1997) から拾ったもので、番号はそのページ番号である。内間 (1997) は平山ほか (1992-1993) にある資料を再収録したもので、内間 (1983) の分類にしたがっている。出典が 92/XX になっているものは内間 (1992b) から拾ったもので、XX はそのページ番号である。内間 (1992b) の資料は音声表記になっていて、アクセントの音韻注記はない。
- (2) Ai の例のほかに、「やしがに」?am[~]ma[~]ku (71) 対「蝸牛」チンナミ 1 [~]innami (70) も挙げられるが、インフォーマントは「蝸牛」を [~]innami と発音する。
- (3) wu:[~]mun 対 mi:[~]mun の音調の違いが体系的な区別であるのは次のことから察せられる。次の語形はすべて /○○○○1/ として分類されているが、wu:-「雄」で始まる wu:ma:「雄馬」(62), wu:ru:「雄鶏」(128) に対して、mi:-「雌」で始まる語形は mi:ma:「雌馬」(157), mi:ru:「雌鳥」(128) のように、wu:-語形は wu:[~]mun と、そして mi:-語形は mi:[~]mun と同じ音調で発音される。
- (4) 内間 (1982: 367) では B ii の「腸」は Farawata になっているが、インフォーマントの発音

- は harawata で、これは内間 (1997: 114) と合致する。
- (5) この語形に助詞が低接することはインフォーマントから確認した。
- (6) (1) の左の欄の無印の動詞と中央の欄の語末の 1 の動詞の違いは助詞が高接するか低接するかの違いを反映するようである。だが、内間 (1997) に同一の単語と思われる /クーユン/「塞ぐ」(145) と /クーユン1/「閉める」(97), /ウイユン/ ~ /ウイユン1/「植える」(55) (以上すべて ●●●●●), /アギーン/「上げる」(45) と /アギン1/「嘔吐する」(133) (○ (●) ●●), /ウットゥン/「打つ」(57) と /ウットゥン1/「撃つ」(57) (○○●●), /イレユン/ (87) ~ /イレユン1/ (146)「答える」(○○○●●) のような例から、動詞の語末の 1 の記入に一貫性がないことがわかる。本稿では動詞の終止形に 1 があると考へて、(3) の名詞と同じような過程で語末 2 拍に高音調が付与されると解釈する。
- (7) 軽音節で始まる語形の一拍目が低いと規定しないのは、nri:n「濡れる」(129, 92/73), mmi:「兄」(48) の例が示すように、軽音節と考えられない語頭の撥音音素が低い音調であらわれるためである。だが、n:ɔ̃u-ne「溝に」(92/70) の音調からわかるように、撥音が長い /NN/ は重音節を形成する。高起式の語形は二拍目を含む音節から高いと規定できる。
- (8) この -Vjun ~ -Vin の交替は「減る」ɕinaĩn (146; 内間 1983: 285) ~ ɕinajun (内間 1992a: 299; 1992b: 73) と「買う」hoĩn (内間 1983: 287) ~ ho:jun (66, 内間 1992a: 300R) の例が示すように高起音調動詞にもみられる。
- (9) 弱強型の韻脚には次の三つの形がある (Hayes 1995: 65, 71)。
- 二つの軽音節 (計 2 音節 2 拍)
 - 一つの重音節 (計 1 音節 2 ~ 3 拍)
 - 一つの軽音節とそれに続く一つの重音節 (計 2 音節 3 ~ 4 拍)
- (10) ただし、次の例が示すように一部の文末助詞の場合は高音調は移動しない — ?aiñ-ɕa:「あるねえ」(129), kun-jo:「来るよ」(162), tuĩn-ro:「取るぞ」(105), sasam-mun-ro:「ささないぞ」(140R), kun-te:「来るはず」(126R), naran-na「あるねえ」(129)。
- (11) 韻脚全体が高音調になる現象はバブアニューギニアのモロベ州で話されているオーストロネシア語族オセアニア語派のヤベム語およびブカワ語にもみられる (Ross 1993: 137)。松森 (2013) は南琉球の与那覇方言に非標準的な韻脚を想定し、韻脚全体が高あるいは低になると分析したが、松森 (2017: 7) はこの単位を韻脚ではなく、韻律語としている。
- (12) 内間 (1997: 49) に ɣiraŋku:fɛn とあるが、-fɛn の前の母音が無声化しているためにその拍は高音調として記録されなかったと思われる。
- (13) 内間・新垣 (2000: 459) は「柔らかい」を jaFara:fɛn として挙げているが、本稿の分析が正しいなら、その確定条件形は jaFa.rasa.riba (jaF.Fara.sari.ba との音調の上昇・下降位置の違いに注目) が予想される。また、mi:ɕikja:fɛn「眩しい」(151) の確定条件形の音調は mi:ɕikja.rasa.riba として挙げられているが、インフォーマントは本稿の分析で予想される mi:ɕikja.rasa.riba と発音する。
- (14) インフォーマントは pin.so:ra:sari.ba と発音するが、内間 (1997: 153) にはインフォーマントが許容しない pin.so:ra:ra:sari.ba とある。
- (15) 形容詞の確定条件系は通時的には形容詞語幹 -sa + areba という複合語で、-sa およびその前の音節に高音調が付与されるのは (2) の動詞や (3) の名詞の音調型と同じである。-sa が入っている韻脚全体が高くなるのは、…-sa+areba の融合と関係がありそうである。
- (16) これは (2) の動詞終止形と一見異なるようであるが、形容詞の終止形は通時的には形容詞語幹 -sa + ain (比較: ?aiñ「ある」) に由来すると思われるので、註15にある分析に従えば、まずは (2) の動詞と同じように語末拍 (-sa) とその前の拍が高くなり、続いて -ain が融合することによって語末音節全体が高くなったと考えられる。

- (17) 国立国語研究所 (1971: 54-5) によると「?uhujumi は祭りの最初の日に、各家ごとに餅をつくって、各々の資産に応じてそれをウチグシク山というところへ奉納する儀式をいう。sinu:gu または sinugui は、次の日に、粟や稷でつくったどぶろくをウチマンモーという広場で神に奉げる儀式をいう」という。
- (18) ?aŋi-ma.ru: も掲載されている (138R) が、インフォーマントはこの発音を許容しない。
- (19) 内間 (1997: 126) に (7m) の音調で、複合動詞と無関係の garagara: 「鳴子」があるが、同書に garagara: (65L, 105L) もあって、前者の方が誤植である可能性が高いと思われる。
- (20) 内間 (1994: 211) に、渡久地方言の「[マーチ]」などのような尾高下型も瀬底方言にはない」とあるが、kwaiŋa-ne: 「会社」(66R) や bjo:kī-sai 「病気で」(82R) の移入語の例の存在は認められる。
- (21) 下記の例の音調はインフォーマントから確認を得た。

参考文献

- 内間直仁 (1982) 「沖縄県本部町方言 (沖縄)」平山輝男 (編) 『全国方言辞典 2』375-382. 東京：角川書店。
- 内間直仁 (1983) 「沖縄県本部町方言 (沖縄)」平山輝男 (編) 『全国方言辞典 1』282-294. 東京：角川書店。
- 内間直仁 (1992a) 「瀬底 (沖縄北部) 方言」平山輝男他 (編) 『現代日本語方言大辞典 1』297-301. 東京：明治書院。
- 内間直仁 (1992b) 「各地録音紹介 瀬底島方言」『国文学 解釈と鑑賞』57:7. 75-63.
- 内間直仁 (1994) 「言語」本部町史編集委員会 (編) 『本部町史 通史編 下』163-237.
- 内間直仁 (1997) 「方言基礎語彙」野原三義 (編) 『沖縄県のことば (北琉球)』41-168. 東京：明治書院。
- 内間直仁・新垣公弥子 (2000) 『沖縄北部・南部方言の記述的研究』東京：風間書房。
- 国立国語研究所 (編) (1971) 『沖縄・瀬底島方言』(方言録音資料シリーズ 12).
- 平山輝男・大島一郎・大野真男・久野 真・久野マリ子・杉村孝夫 (編) (1992-1993) 『現代日本語方言大辞典 1』-『現代日本語方言大辞典 6』東京：明治書院。
- 松森晶子 (2013) 「宮古島与那覇方言のアクセント交替 — 3モーラのフットを持つ方言 —」『日本女子大学 紀要 文学部』62: 1-21.
- 松森晶子 (2017) 「北琉球における C 系列 2 音節名詞の語頭音節の長音化 — その原因について考える —」『日本語の研究』13.1: 1-16.
- Hayes, Bruce. 1995. *Metrical Stress Theory: Principles and case studies*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Ross, Malcolm. (1993) “Tonogenesis in the North Huon Gulf chain.” In Jerold A. Edmondson and Kenneth J. Gregerson (eds.) *Tonality in Austronesian Languages*. Oceanic Linguistics Special Publication No. 24. Pp. 133-53. Honolulu, HI: University of Hawai'i Press.

謝辞

内間直仁先生が教職を引退なさってから、先生といっしょに瀬底方言のアクセントを分析しなおすつもりだったが、先生の早すぎるご逝去のためにその機会は叶わなかった。2017年11月7日に瀬底島在住の松本直也氏の紹介で仲田政敏 (昭和7年生まれ) と好子 (昭和7年生まれ) 夫妻から一時間ほど島ことばを教えていただき、心からお礼を申し上げる。